

‘呪われた血’の叛逆詩人(8)

George Gordon Byron

楠 本 哲 夫

目 次

第六章 Separation

——宿命の離別——

本稿のテーマは

——詩人バイロンが 一条の光を求め、夢をかけた結婚、それが、
あまりにも 束^{つか}の間^まにして はかなく消え去った。その出会
いより、すでに神の仕組んだ宿命を感じる。詩人にとって
結婚—Separation は、何であったのか？ その疑義^{きぎ}を究める
こと——
である。

Separation !

すれちがい、すれちがい！

怒濤する激情的、天才詩人バイロン！

冷徹な、沈着な、思索的、知性的、宗教的、救世主的、a blue stocking
アナベラ！

別離とは！

そこに、接合点はあったはずなのに

運命の神は和解を、調整を、融合点を、接点を示唆することなく、ただ、シ
ニカルな微苦笑をたたえてじっとみつめるのみ

所詮は 人間界のこと

Helpless! どうにもならぬ!／

その Separation を歎くのは 愚かなこと!／

それでよいのだ!／ 吾人は そう思う

Byron の心を, Annabella の心を

Spiral 螺線を描きつつ走る人の世は生命つくる日, Straight line を描いて突入する。そのみが 安住の、憩いの 場所なのだ。漂泊ふことのない魂の棲み家なのだ。

A—B の場合、——それは悲劇でも、なんでもなかった!／

虚のバイロン!／ 真のバイロン!／

それを看破り得なかった アナベラ

抜群のアナベラの数学をもってしても、解き得なかった 複雑な線!／

しほ
絞り出した答は 明らかに 誤答だったのか???

それは 妻という坐^{いす}にあったが故の。

Annabella が Piccadily T 13の家を出て以来、二人にとって結局、a quiet separation への道をたどりつつ、二つの渦^{うず}が 相関しつつ 動いてゆく。

Annabella の側で——

Byron の、あらゆる手紙、あらゆる言辭、あらゆる行動が 詳細に調べられ、精密に検討され 4 ヶ月の歳月を経る。

Byron という人間像が そこに クッキリと、いつもの明快さをもって 浮き出てくる。

そして彼の妻 Annabella の態度は、いつも一部 ^{あいまい} 曖昧性をのこし 不明瞭である。

1816年 1月中、Byron の心は 二つの面で揺れ動いていた。

Ada の出生に関して彼のたどりついた興奮の絶頂点は 維持されていた。

一方、まだ、Piccadily Terrace に彼と一緒にいた Augusta は、彼が、今日の、いわゆる、hypermania と、呼ばれる、症状的性格、熱狂的性癖のゆえに もろもろの奇行を示し、奇言に及ぶのではなからうかと 考え始めていた。

“私は、彼の眼の中に、あらかじめ——奇言、奇行に及ぶ前に——ある狂暴性を感じとって ハッとして 驚くことが、たびたび あったのよ。”

彼女は、Annabella に、そう、語った。“そして、彼が^{みづか}自らを、‘The greatest man living’ not excepting Napoleon である’、と語ったとき——ああ、Napoleon までも 除外しないでもいいのではないかと、私には とても わからないことだけど——私は、彼が きっと、hypermania だ との確信をもったのよ。”

Byron の従兄の George A. Byron も まだ Piccadily の屋敷にとどまっていた、Byron に対して Annabella 側から別居理由簡条書が提示されるだろうことを警告した。

そのとき、Byron は

‘好きなように やらせて おけよ。むしろ僕は そのほうを よろこぶよ。’

と全く 意に介しなかった。そして 劇場での乱交——実は, Susan Boyce のみが 唯一の, 彼と情を通じ合った仲だったのだが——を吹聴しながら, そして また, Annabella が, 自分と離婚したら すぐに, 結婚前に興味を抱いていた総明な, 金持の, 貴族の相続人である, 美しい Miss Margaret Mercer Elphinstone と結婚するよと 自慢し, 吹聴した。

一年間離れていた, Thomas Moore でさへ, あまりにも変わった Byron に 気付いたほどだった。

彼は手紙をかいて,

‘親愛なる Byron よ, 君の最近の手紙の中に 不穏な, ある謎めいた, ふんいきを感じるのが, 同時にまた, 君のいつもの, あの活潑な魂の, ^{かたつ} 豁達な, 弾力性, 伸縮性がなくなったのは どうしたのだろう。そのことが, ずっと 僕の心に不安にのしかかっているのだが……’

と, その変わりようを心配していた。

結婚が Byron 自身の心にも 同様に, 不快に 重くのしかかっていた。少なくとも心の一部に。

つまり, 激しい感情の荒れ狂うとき, その心の蝶番で 右へ左へと 激しく 揺れるままに放置した, あの心の一部に。

しかし, また, 心の他の片隅では——Annabella と娘 Ada との平穏な家庭生活が, やがて, そのうち, 必ずや, 帰ってくるであろうことを 期待していた。

このような詩人の期待感は——Annabella が Piccadilly Terrace 13 の屋敷

を出て、Kirkby の荘園に移ってからすぐの時期に Annabella から 受取った二通の手紙から ほのぼのと つたわってくるようだった。

Annabella は——

別居のため 両親の用意してくれた Kirkby の家へと移りすんだが、それは、Byron が 彼女を Piccadilly から追放——a myth which dies hard

——したためだという全面的理由によるものではなくて、Baillie 医師が ‘実験的別居’ を彼女にすすめたためだ と考える方が、妥当かもしれない。

さらに Dr. Baillie は Byron の 躁鬱病的興奮状態が 果して真に hypermania と診断されるべきなのか それとも彼の激しい痼癖による狂気の擬態なのか、その決定的診断が 吊ぶらりんの状態であり、不明のままに決めかねているときだったので、彼を焦^{いら}だたせないように、慰めるため、おだやかなタッチ^{たより}の便を書き送るようにと Annabella に忠告した。

その忠告にしたがって Annabella は、Byron に宛て 1月15日、書き送った——

“Dearest B. Ada’s love to you with mine. Pip.”

——親愛なるバイロンへ。

エイダの愛を私の愛とともに、あなたへおくる

ピップ より。

——Byron は 幸福な親婚当時、Annabella を Pippin, Pip (かわいい^{りんご}林檎) と呼び Annabella からは Duck, Goose と呼ばれていた。

また16日には、

‘Dearest Duck,

.....

Love to the goose and every body's love to you both from henth.
Ever thy most loving Pippin... Pip... Ip'

親愛なるダックへ。

.....

グースへの愛をこめ、あなた方、お二人への、みんなの愛をこめ、この
地より あなたへ おくる。

いつも変わらぬ、あなたを最も愛する

ピピン、……ピップ、……イップより。

——……you both は Augusta のことを 含めて、いったのだろうか……

しかし、それから一両日もたたないうちに——

Pippin の気持は急変して、Byron のこれまでの^{ひど}酷い仕打のすべてを両親に
打明けてしまった。

そして、16日に予定し、Annabella 一家の者たちが、待ち望んでいた、Kirk-
by への Byron 訪問は 延ばすようにと 要請した。

何故？

Annabella の両親は彼女に命じた。

もし、待医 Le Mann の、Byron への診断が 'sane' であり、'発狂的症状' で
はない とすれば、Annabella は Byron の許を立ち去って 別去すべきである
ことを 彼女に約束させた。

20日、Lady Noel——Annabella の母——は、16項目の理由で、Byron を
起訴する Annabella のしたための告発状を用意してロンドンにおもむいた。

酷刑、姦通、威嚇、侮辱、……等々の項目中には、彼の、Drury Lane Theatre
での、ある夜の Convulsive fit のことも挙げられていた。

これは——Massinger の戯曲、‘A New Way to Pay Old Debts ,借金取立
てを撃退する新手’^{ひらて}の中で、悪役 Sir Giles Overreach の演じた Edmund Kean
の ぞっとするような 狂気の擬態による刺激 が原因 であったのだろう。

おそらく、この狂気と借財のテーマが Byron の 痙攣^{けいれん}的発作の擬態演出と
なったものだろう。

Annabella が list にのせた threat の一つは Byron が 愛人を Piccadilly
Terrace No. 13 の家^{かこ}に囲ったこと である。

また、もう一つは、Byron の気に入りの姪^{めい} Georgiana——当時7才——を墮
落させたことである。

この、いずれの場合も、——Shelley に言わせると——人を驚かせ、一騒動
をおこすことの、大好きだった Byron の、子供じみた 茶目っ気たっぷり、
稚気愛すべき性癖のあらわれにすぎなかったのである。

たとえば、——

不貞を働いた情人を 簀巻^{すきま}にして溺死させた——と話して Claire Clairmont
を驚かせた如きと 同様のケースにすぎない と Shelley は 語る。

また、Georgiana の生涯は、Byron が、これを駄目にしたのではなく、彼女の
夫——a Trevanin Cousin——、そして Medora——彼女の sister、そして彼女
の amoral mother, Augusta のせいなのであった。

Byron の 高潔な人格は——

今日、万人の認めるところであり、Shelley は、Göthe は、そして Preshington
伯爵夫人は——有名なあの “バイロン卿との会話日記” の中で——そして、

その生涯を Byron に任えた忠僕 Fletcher そして彼の親友の数々が 口をきわめて 高く評価している。

Annabella が 彼の妻の坐にあつて、Mrs Byron として、夫、Byron を告訴した そのことばが、

Byron is not mad, but bād!

と 断定したことに、大変な 誤算があり、冷徹な数学者であつた Annabella、生涯を通じて信仰を貫いた、神に任へた Annabella が、神の許した、夫 Byron を何故に、許せなかつたのだらう？

すれちがい！ 温い家庭を夢見た Byron をうち据え、うち砕いた Annabella の背信を Byron は 生涯許さなかつた！

すれちがい！

Annabella は——

しかし、Augusta との近親相姦は、告訴状のリストの中には^あ挙げなかつた。

Annabella が 彼女、Aususta の疑惑について述べなかつたのは、Byron と Augusta の仲の最悪の事態（近親相姦）についての噂は まちがいだと推断したためである。

16日に Aususta 宛に手紙をかいて

“私は 貴女を誤解してきた。‘I have wronged you!’”

と言ったのは、結婚以来、この姉弟が性的交渉をもったとは、信じたくない、信じられない と言いたかったのであろう。

Annabella は、結婚以来、二人の仲を考えると き 悶々の日々をおくり、Augusta を刺し自分も死にたいと 考えたことも、いくたび かあったことを 述懐している。

Annabella は、母親が ロンドンに出かけた後は とても心が沈んでいった。
彼女は——

“If only in the coalhole ①...”

——たとえば、貯炭場の片隅でもいいから——ロンドンの No.13 の、屋敷に帰りたい、と帰心、矢の如き、Byron を慕う心 が、切々と湧いてきて 悶え、苦しみ、のたうちまわったのである。

Note ①

石炭に恵まれたロンドンでは、当時、各家庭には、その家の裏の片隅に必ず、‘貯炭場’ Coalhole があった。

If only in the coalhole は、そんなところから Annabella の、Byron への切なる慕情を訴えた気持である。

彼女の心にどんな変化が起きていたのだろう。Prof. Marchand は彼女の、この急変を London からの便りが届いたことと関係づけている。Augusta からの、George A. Byron (詩人の従兄) からの、Mrs Clermont のからの——まだ、Piccadilly Terrace にいたのだが——便りで いろいろの事情を察知して、Byronが ‘not mad but bad’——狂っているのではなく、実は、背徳者なのである——だと心に ^{ひらめ}閃き、彼女は ハッとしてはっきりと悟ったのである。

彼女は 詩人への思慕と愛が深かったがゆえにこそ、^{まつた}‘完く’の、自己^{きまん}欺瞞’に 陥入っていた。それが 今、もろくも がらがらと崩れおちていった！

さらに——

18日付の、彼女の友、Selina Doyle からの手紙は 彼女に対して きっぱりと ‘別居’ Separation という 最終的処置 を 決断すべきときであることを忠告してきた。

“Byron の病氣 Complaint は、貴女の ‘Jealous Love’——神が絶対的信仰を求めて、その掟に従順を誓うことに動機づけられた Annabella の詩人への愛——に帰因するのであるから、Byron の insanity 狂気の沙汰の数々は、Annabella が詩人と共に暮らすことは、いつも、彼の病的状態を 和らげるどころか益々、助長し 悪化させてゆくだけのことだから。”と 別居 のことを忠告し、せまる ことばだった。

ロンドンからの便りとは別個に、Annabella は、この別居の間、じっくりと、自分を再考して、一からやり直すべく、これまでの生活を反省して、自分の過去を粉砕するまでの、発見に到達した。

深く自己分析を行うことによって、これまでずっと、自分の生活、自分の考え方に対してつねに、自らの方法と自らの才能を信じ、これを徹底して追求し、守り続けてきた。

かつて Byron は、新婚の甘き生活の間——Annabella の感情的性格について、その猜疑的性格、そして、いわれなき、謎めいた不快感の襲来について不満を洩らしたことがあった。

この Annabella の感情的性格については、それが、さらに——神経の極度にきんちょうした、内向的性格へと発展していった。

それがByron の場合とちがって——内にこもり、彼女の厳格な宗教観、哲学観によって抑圧されていった。

それが Annabella の場合だった。

Kirkby の別居において、その閉じ籠められたものが、その蓋を粉碎して、
一挙に、爆発したのである。

だから、彼女が、今、Separation のことを考え悩むとき——

実は、彼女がそう推断した如き、Byron was not mad, but *bad*! 背徳
の故に、Byron を責めることは、そこに、Separation の帰因を求めようとする
ことは、まったく、当を得ないことだったので、彼女の side から、このこと
を切り出されたとき、Byron は、むしろ、啞然として、かつ、憤慨したのは
無理からぬことことであった。

Byron は、この Annabella の感情的性格について——

彼女に対し、十分に配慮しながら、みづからの口から 再三 注意してきた。

しからば、その爆発の理由は——

実は、Annabella 自身が、Byron を御してゆく魔女の力を持ち得なかったこ
と——彼女が自らの使命であると自覚した——自らを Byron のために救世主
たり得る力量がなかったことを 身をもって実証したことが、そもそも、根本
的な理由、敗因だったのである。

非は、Byron にあったのではなくて、歴然と Annabella の方にあった。

.....

Even though unforgiving, never

’Gainst thee shall my heart rebel,

.....

ぼくの心は、お前を
ゆるしては いないけれど、
お前に
そむ
背こうとは 思っていない。

後になって、Annabella より Separation の訴を受けとった Byron は、むしろ、その瞬間、——

啞然として 放心した のは無理からぬことであり、最終的に Separation が決った その夜、Piccadilly の、今は、家財道具一切を売り払った、ガランとした 広い屋敷の中で、明日は、もうこの家から出てゆこうとするとき、短かかった Annabella との1年4ヵ月の 結婚生活を 偲びつつ、ふり落ちる涙を払おうとせず、その涙のにじむ紙の上に Annabella への‘袂別の詩’をかいた。

“さらば汝よ、！”

と、袂別を告げた、！ その詩は うた しるしたのではない。自分の紅血を紙の上に塗ったのだ、！

Byron は Annabella に対し激怒し、その心の中は、終生、彼女をゆるさなかった、和解し得なかったのは、さもあらなむ と、詩人の身辺の者たちは、詩人に対し 深い同情を一樣によせている。

Annabella は、Byron たましいの魂を 救うことによって天国へ導くことが、自分の使命である、それは、自分をおいて他にはいないのだという使命感にひたすらとりつかれてきた。それは彼女の信奉した、その宗教により根強く培われてきた信念によるものであり、Byron を救うことこそ、自分の唯一の生甲斐だと信じ込んできたのであった。

このことは、この救世主的宗教観こそ、彼女にとって最も重要な意義をもっていた。それが二人を今まで、結んでいた唯一の糸であった。それが今、プツリと切れたのである。Byron との同居中、彼女はその宗教観によって自らの信念をあくまで貫くことができると確信していた。

Byron の顧問弁護士 Hanson から Byron の暴力に対する恐怖についてきかれたとき、

“彼の暴力は ちっともこわくなかった。私の目は、つねに彼の目を見下^{みおろ}していたから。それは、猛獣^{つかい}使 が ライオンを馴らす目 ??? であったから。” と Annabella は、こたえた。

しかし——

一たび、Byron のもとから離れて別居した今、その目は ひたすらに 自分自身に向けられた。そして そこに、みづから ぞっとするような 真実を感じとった。

“自分は 結婚に完全に敗れた。

故に 自分の使命において敗れることは、必定だ。

自分は 救いがたい ‘Lucifer’ 悪魔 を恋していたのだ！”

1851年、彼女は自ら、そう、はっきりと 書きつけることになったのだが——

“Byron の心には 神の意志と人間の掟を無視し、反逆しようとする、故意の意志が存在した。” と。

そして Byron 自身——

自分の Satanism を認めていたようで、Annabella に向って 激しい口調で 苦々しく吐きすてるように言った。

“自分に近づくすべての者を破滅に導くことが自分の背負った宿命なのだ。”と。

Annabella は——

今の、この別居生活において、翻然として、うす皮を剥ぐように ハッとして 悟った。

“Byron を御して 私が 天国へと導くことは最早と絶望的である。いや、それだけでなく、Byron 自身が 私を 地獄への道連れとして 曳きづつてゆくであろう。そして、私自身の道徳感も ‘worthless and debased’ なものとして腐らせて しまうだろう。これは 危険なことだワ。”

このような理由ゆえにこそ、彼女は絶対にの Byron のもとへ 帰ってはならなかったのである。彼女は今、うち砕かれた誇りと、自分の魂への恐怖、不安のゆえに 悶え、苦しんでいた。

その間、一方 Byron は——

ちっとも行詰りを感じないかのように、気ままに、気まぐれな生活を送っていた。

彼が、自らの困窮状態のゆえに、今はもうほとんど資金を援助することは出来なくなった慈善活動に奔走し、忙殺される日々を送りながら、Annabella からくる手紙には返事をかき送ることなく放置していた。

Byron の借金苦を見かねた Murray が、友情より かなりの金をおくろうとしたが、Byron は、これを受取ろうとせず、むしろ、拒否して、それが、詩

人の Coleridge, 劇作家の Maturin, Oscar Wilde の大叔父, 急進的哲学者 William Godwin の間で分配されるようにと言った。

Annabella の両親は Byron の case 病症の実態の調査を積極的に進めていた。
医師 LeMann は Byron の病状について, Lady Noel に報告した。

“Byron については, これといった発狂の兆しは 全くないので ‘肝臓障害’ と診断します。” と。

そこで彼女は 娘 Annabella の separation 別居 の件を 弁護士 Dr. Stephen の手に一任することに決定した。そして彼のすすめによって Anna-bella の父親は 2月2日——

Byron に対して a quiet separation を申し出る手紙を送った。

Byron が この手紙を静かに受取る ということは 到底 考えられぬことだった。Byron は 烈火の如く 怒った。

Hobhouse によれば——5日, Byron は, この予期もしなかったショックによって完全に Knocked up うちのめされて——実は, この日, 5日は, Anna-bella を別居中の Kirkby に訪ねてゆくことに彼女とも打合せが出来ていた日だったので——しかしながら, この通知状は 無視することに断乎として決意する。

Byron は, この危機状態の到来に, Lady Noel と Mrs Clermont を責め立てた。そして一方, Annabella に宛てて, 感情をこめた, 激昂した, 熱烈な手紙を書き送った。

“たしかに、この過^とし方^{かた}、僕は、いろいろと、誤^{あやま}ちを犯してきた。だが、それは僕の健康がすぐれなかったこと、金銭的に困^{こま}っていたこと、に困^よるものではあったが——しかし、僕は君を愛した……。そして、これからも、君を絶^と対^{たい}、あきらめることはしないよ。”

....but I loved you...., and will not give you up.....

Annabella は——

別居申立の手紙が父親から、Byron 宛に送られて以来、茫^{ぼうぜん}然として無感動となり、ほとんど自分を失ってしまった。

Byron からの返事を受けとったとき、苦悶のあまり、床の上で七転八倒して、身も世もあらずのたうち回った。

しかし——

それにもかかわらず、彼女はきわめて冷^{ひやや}かに Byron に手紙をかき送らねばならなかった。Byron は彼女の心変わりを、そのあまりにも急変した彼女の冷^{ひやや}たさをきつく責めたほどであった。

彼女は、ひたすらに、激しい口調で、自分の終始一貫した、これまでの考え方を述べて、Byron に対してこれまで貫いてきた貞節、別居以来、尚も、そうであった、自分の考えの一貫性をひたすら弁護し、

“今は、もう、私の決意は、変えることは出来ない。”

と書き送って、Byron の許を去りゆくことに対して、一つの重^{おも}大^{だい}な理^り由^{ゆう}を述べた。

それは——

Byron の ‘derangement’ 錯乱 ではなくて、彼の誇りとした 彼の principle を Byron が 全面的に放棄したこと、即ち、the Lucifer の主テーマとなった、彼の、悪魔への身売り——“悪魔よ、我が美徳、^{なれ}汝は、悪である” であった

Hobhouse は この破局の原因を探ったが、最初、全く見当もつかなかった。
Byron は——

“自分としては、直接の原因が どうしても推測できない” と Hobhouse に語り、彼には ‘all’ 一切 のことをつつみかくさず うち明けたことを 確言した。

そこで Hobhouse は この別居申立は、Byron の言葉によれば、到底、不可解で、説明のつかない、納得し難いもので、正しい判断を下すべく、Augsta と G. A. Byron (Byron の従兄) に探り^{きぐ}を入れ調べたところ、結局、‘恐怖’ の数々について 新しい情報を得た。

即ち、——Byron の Annabella に対する威嚇、激怒、無視、他の女性との関係、A の遂い出し、ドアへの施錠、ピストル etc ……と彼の非行が ならべられた。

そして 結局、Byron 自身の口からも、苦悶のうちに ほぼ、これと同じ事実が きき出された。

そして Byron 自身は、今——

自分の頭を、ピストルで、射抜くこと——さもなくば——ひとたび、“あんな女なんか” “Such a Woman” を逃れ得て、むしろ、さばさばとして、Hobby

と直ちに外国へと 出奔したい という衝動——との間で、心はしきりと揺れ動いていた。

2月22日、Annabella は——

突然 Lushington に、Byron との別居申立の‘秘めていた理由’を打明けた。それは——彼女の心の中で、次第につのりゆく、彼の‘近親相姦への疑惑’だったのである。

今まで Lushington は、なんとか和解の道を……と、それをすすめてきたのである。しかし、このことをうちあけられるや、その態度は全く一変した。急変して硬化し、全く逆になった。“Annabella は、もう、これ以上、Byron と交渉をもつべきではない。もってはならない”と忠告した。

そして彼女は——

近親相姦の罪を実証することは出来なかったとしても、これが彼女を苦悶させた Byron のやり方として 注目され、それが、彼女が Byron の許をさりゆく有力な潜在的^{潜在的}理由として注目され、喚起された。

1週間後、2月29日——

Augusta と Byron の間のことが、二人にきわめて不利な噂として 巷に^{ちまた}流れ、広まり始めていた。そして二人はこのことを知った。

その日、Byron は Moore に対して攻撃的に書き送った。

“僕は、今、世の中、世間のすべてと その妻^{その妻}に対して断じて戦う、いや、むしろ、世の中、世間のすべてと、僕の妻^{僕の妻}に対して、断じて戦う”と書き送った。

しかし Hobhouse は 今——

どのような戦にも反対し、むしろ秘やかな、和解を望んでいた。

3月13日、Annabella 自身、Hobhouse に打明けた。それは、

“彼女が 誰にも、もらしたことがないこと、そして 法廷では 彼女自身が
申開きせねばならぬときには、それをみづから口にするであろう重大事であっ
た。”

Hobhouse は——

この問題を おだやかに話し合っ解決するよう Byron を説得することに成
功すれば、Annabella から a quiet pro qui を受ける ことの確約をとろうと
決心していた。そのため、Hobhouse は、Byron に不利な、不名誉な Charges
告訴・罪状の数々のリストを提示して Annabella に、これを否定撤回するよう
に求めた。

“残忍、組織的、報いられない無視、重大な、そして繰り返された不貞、近親
相姦、そして——” のリストを提示した。

この——ブランクは、Sodomy (男色) の罪であった。

しかし Hobhouse は 全面的には、いや、ほんの一部しか、成功しなかった。
というのは——

Annabella の 最終的申立としては、“最後の二つの(リスト中の) 告発罪状
は否定、撤回できない。

だが、しかし、その噂をまいたのは、自分ではない。さらに、だが、別居の
件で 争わねばならない場合、この二つの罪状を理由として申立てることはし
ない。” と述べた。

Byron は 争うだろうか???

Hobhouse が 和解の問題に ちょっと触れただけで、Byron は、彼の親友
Hobhouse の意中をすなおに受け入れて、その挑戦的態度、意識を放棄した。

この点、Byron は、いつもの如く、友人達にとって 御し易い、扱い易い、いつもの、素直な性格を示して、彼の忠言をきき容れた。

Moore に対して——妻として、Annabella を選んだことで 彼が Byron を 慰め、悔んでくれたことに対して——

3月8日、彼に 返事を書きのべて

“Unless in choosing at all’

そもそも、選んだ という点でなければ、僕は 全くまちがっては いなかったんだ。”

と答えている。

Augusta の場合同様 この Disaster 不幸に対して 彼は みづからを 責めつけた。彼は——

春秋に富んだ日の、あの放蕩、世の中を彷徨し、うろつき廻ったことで、おのずから、身につけた、自分の奇癖、そして、気まぐれを認めた。結婚生活の間の、失われた健康と取り乱したゆえの不気嫌が、過激 と 癪癪 を醸し出した ことを素直に認めた。

しかし、もし、彼が 金銭的に、まあまあやってゆける経済状態にあったなら、彼は、どうにか、うまくやってゆけただろうに、この Disaster 不幸を招来しなかっただろうのに……。

翌3月9日——

Byron は 提示された金銭的解決には、ほぼ同意、承諾した。それは Anna-bella の “two report” の 否定、撤回 ——部分的ではあったが——を彼が 受けとったと 同じ日のことだった。

‘別居命令’を承諾すれば、彼と Annabella は 彼女の現在の1,000パウンドの資産を平等に分けることになり、Lady Noel (A の母) が 死んだときは Kirkby の荘園も また、公平な条件で分配されることになるであろう。

Augusta の立場は しかし、今となっては、もっと もっと不幸であった。彼女の懐妊も、かなり月がすすみ——この度は、弁解の余地なく、Byron がその父親であると、世間の雀たちは 騒ぎ立てていた。

Colonel Leigh と Annabella は 信頼できた。

Leigh は、その噂は 否定し、Annabella は、ほんのわずかの疑惑がのこる間は、Augusta との同居を誓って放棄する、という、その放棄宣言は拒否した。——もっとも、そのincestを赦す^{ゆる}ように思われるという危険性は あったけれども——。

Annabella は 4月5日、Augusta に手紙をかけた。

“私は、最悪の過^{あやま}ちに対して、いささかの 弁解をも認めないほど、それほど、私は無慈悲、残酷ではなかったし、また、今後も、それほど 無慈悲、残酷であることはできないでしょう。”

しかし——

Piccadilly で Augusta が Byron と引続いて同居していることは、Annabella にとっては、もう耐え難い、がまんのできないこととなっていたのだけれども。

Augusta は、St. James's Palace に移っていった。そこで、あの mercilessly virtuous な Queen Charlotte シャロtte姫の bedchamber woman としてのつとめを 再びはじめることになった。

Byron は、外遊の計画を立てることで、悲しみを忘れようとした。

3月21日、いつも緩慢な 顧問弁護士 Hanson に手紙をかいて Annabella との結婚取決による、ぐづついている未処理の利権^{いそ}を忙ぐようと 催促した。

“そして、このことは、現在の separation とは全く無関係だと考えられるから” と書き送った。

この現在の‘話し合い’は、つまり、separation の話し合いは、法的には、きっかり、1ヵ月後に、判決が下ることになった。

しかし Byron は、1816年3月、4日、いや、実に、その生涯を終えるまで、この別居の特別の理由が、どうしても 自分には わからないと 主張しつづけた。

もし、そうであるならば——

彼の生涯について書いた、多くの伝記作家達は、その原因を探るために Byron すらまだ踏みこんだことのない、踏みこめなかった秘密の領域へと 踏みこんで ゆかねばならないことだろう。

その理由の究明にあたって——

先ず、第一に、——Sodomy 男色 は、はねつけてよいであろう。除外してもよいだろう。

積極的証拠がない。これに最も近いことと言えば、何年か経って後の、Hobhouse による次の評言であろう。

即ち、Lord Holland が——Byron が、‘had tried to ~ her.’ と語ったことがあるという、Hobhouse の評言。

しかし、これとて、単なる‘思惑’の域を脱せず、a quiet separation を認

めたことでの Byron の認めた、支払わねばならなかった 代償の一部であったかもしれない。

第二に——

一つの否定的証拠はある。

George Wilmot が Hobhouse に 語ったところによれば、その cause は ‘horrid’ ぞっとする、ひどいものであったが、‘an enormity’ 大罪、非道、ではなかった。

当時、sodomy は 大罪であったので、Hobhouse は 敢て、このことばを かけて、その代りに——ダッシュを置いたのだ と。

第三に——

たった一度だけ——多分、斟酌してのことだろうが——Byron が、それを試みたとしても、何故 Annabella には彼を——彼女が熱愛した一人の男性、Byron を——見捨てたのか？

もし、それが Byron の習慣であったとするならば、何故に、彼女は、それを寛恕していたのか。

この困惑を、ざっと考えるとき、Annabella が、このような知識にはあまりにも、無知であったのではないか ということも、暗に考えられぬでもない。

だが、しかし、まさか！ それは、笑止千万な、もって一笑に付すべき笑い草であろう。話にもならぬ。

数学的、知性派の Annabella が——human geometry——人間界の相関図——に完全に無知であったことは 考えられぬことであるから。

次に Separation の訴えの主因として——

近親相姦的愛 が 考えられる。

Wilmot の発言としての ‘No enormity’の中には incest は 除外されてはいない。

Hobhouse は、公然と この ことば ‘incest’ を使用した。

‘Incest’ は 20世紀 までは ‘civil crime’ ではなかった。近親相姦の case は、18世紀の tales から いくらでも 挙げることができる。例えば、

‘Zeluco and Vathek’, Alfieri の play, ‘Myrrha’ そして Byron 自身の詩 ‘Parisina’ そして、また、‘the Duke of Cumberland and Princess Sophia’ の 密通の噂 etc。

the Romantics (ロマン派) の Narsisism は、この形態の ‘愛情’ を 特に魅力的なものとしてきた。そして、Lord Lovelace—Byron の曾孫—は彼の ‘Astarte’ の中で——

“Byron 卿が 幼少時より、一緒に育てられたのではない義姉, Augusta との愛は, enormity—大罪—とは、断じて 呼ぶべきものではない。そんな世間の批判は 断じて不当である。” と指摘している。

他方、-John Murray 所有の文献によれば——ずっと後での、Hobhouse と友人の対話を記録したもののだが——Sodomy と Incest は、どちらも 別居申立理由決議書の中からは 除外されている。

Hobhouse は、1816年3月8日に Lady Byron (Annabella) 宛に その否定、撤回を求めてさし出した ブラックリストを 回想しながら、次のように語った。

“私は、一人の人間として、そこまでは、到達し得ないであろうほどの、彼の非道——悪徳、大罪、恐怖、脅迫……——について 書きとめ 記してきました。

そして私は言った。

‘さあ、貴女が、私に、これらの罪状のどれをもって Byron を告訴するか？
そして、そのうち 最も問題となるのは どれか？ をはっきりと話してくれるまでは、私は、この仕事から 一歩もひかない 決心です。’

そして、その彼女からの返事をうけた。

‘それらのうち、どれでも ないのです’ と。

そこで 私は、‘それでは、問題は、何ですか？’ とさらに問いかけたが、Annabellaからは、何の答も きかれなかった。”

記録された このブラックリストが——

もし Byron 詩の中で書かれ、引用され、そして、Annabella の背すじをぞつとさせる結果となった すべての悪徳——殺人、重婚、海賊行為、ホモセックス、Vathek の 悪魔礼讃、そして Zeluco の、自らの子を圧死させた罪 等々の数々——を含むとするならば、それは、まさに おそろべき、身の毛も よだつものであっただろう。

もっとも Ada の出生のときの、Byron の激情は、十分に、Annabella の不吉感を 誘発したことではあったが……。

Annabella の心中では、incest は 除外されていたはずである。

1月16日以降、突然、彼女が 両親に、Byron の非行的仕打ちを訴えた理由となったものは、Augusta への (incest の) 嫌疑では なかった。というのは、一時的にせよ、この嫌疑は Annabella の心から 消えていたから。

そして、彼女が2月22日、Lushington に この疑惑を 一たび 打明けたとき、彼の、和解への計画は一変して Byron 弾圧の方向へとむかい、彼女の口から、sodomy と incest への疑惑が 洩らされた ということは、充分ありうることだった。

そして、それは、Caroline Lamb も、これら Byron の悪徳を^{よみがへ}蘇らせることを、彼女の生甲斐とする如く、3月27日、Annabella を訪ねて Byron の incest と、最悪の罪である sodomy 男色 の告白について彼女に語っている。

‘幻覚的恐怖感’と共に、この、主因としての悪徳に関する‘二つの報告’を、よし、かりに除外視するとして、それならば、只一つだけしか、結局 Separation 申立の結論的理由は考えられぬだろう。

それは——Separation についての、明瞭な 直接的理由は、実はなかった——ということなのである。

その点——僕には、別居申立の直接の原因が全く解らない——という Byron の主張は 正しかった！

それは、偶発すべくして、偶発したのである。それは、多くの不幸な結婚が、そうであったように——。

しかし——

今まで、観てきたように、Separation の原因と考えてよいような——Byron 自身も、口にした——多くの理由はあった。

そして、これらの他に、彼の女性に関する ‘ambivalence’——反対感情の並存——Augusta という只一人の女性は例外として——が 彼自身の image の中に描かれていた ことを挙げることが できるだろう。

そしてそれは 彼が生れつき、hunter（女性なしでは生きられぬ淋しがり屋）であり、つねに 女性につきまとわれた ということへの知識である。

Annabella の側では、一部、口実的、ごまかしの 無情な追求が行われた。Hobhouse によれば一彼女は、Byron を‘わなでつる’ために‘別人’を でっちあげていたのだということを Hobhouse に 打明けている。

健康のすぐれないためのもたらす極度の不安、彼女の母の言ったように 彼女のあまりにも高貴に育った精神は‘忍従’にも似ていた。‘無情にまで有徳的’ではありたくないという 彼女の気持に打ち勝った彼女の‘純粹性’、そして、とりわけ、彼女の全ての力が、がたがたと崩れてしまったこと—— が真相、だったのか。

Byron は、Annabella に対し、嘲笑するかの如く、‘Continental-type marriage’ ヨーロッパ大陸の結婚——当時、ヨーロッパ大陸では、結婚しても、一人だけは 公然と 宣言して、愛人をもつことが法的に許されていた——を擁護したとき、そして Byron と Annabella が お互に 二人の愛人——Byron は Augusta を——をもつことが 許されるとするならば、Annabella は果してどういうふうに 振舞い、どんな 行動に出たであろうか？

彼女は Francis Hodgson 師に手紙を書いた。——

“私の安心、立命の境地は、すべての道徳的宗教的主義、教義を 放棄することによって得られるのだと 考えます。でも、Byron の憎悪のすべては、その道徳的宗教的教義に反撥的に向けられ、彼の一切の努力は一律に、ひとしく、そのことに向けられているのです もの。”

Annabella は 1816年1月2日から15日迄、筆舌には尽しがたい苦しみに悶えつつ 暮してきた。一兩日、Byron の許を離れて 暮したことが、彼女を

ハッ と開眼させた。疲れ果てた彼女の心は、やっと休息を見出すことができた。彼女は二度と古巣に帰って、元の生活に向き合う勇氣は もう二度と湧いてこなかった！

1816年、4月21日——

‘The deed of separation’ 別居の取決は、Byron の友人達の立合の下に署名された。

Piccadilly Terrace 13 番地の屋敷は、すべての借財も 整理され、立退くべく 用意が 出来ていた。

兩人の財産上の取りきめもすむと、Byron の家財は競売に付せられ 一切は他人の手に渡った。

別居成立の夜、ガランとした空家の中に一人 淋しく Byron はいた。

結婚後わずか1年と4ヵ月であった。寂寥の情にかられ、広い部屋の中をぐるぐると廻った。Annabella との在りし日を偲び、さすがに楽しかった思い出は走馬燈のように 脳裏をかすめた。

激しい苦痛が 彼を襲った。

ハラハラと ほうり落つる涙を拭うこともせず 自分の紅血をもって Anna-bella への 訣別の詩^{うた}を 綴った。

さらば 汝よ！ と。

“Fare Thee Well.”

さらば 汝よ

永遠^{とわ}の わかれぞ

汝を^{ゆる} 赦すことなくも

汝に 背くことはあるまじ

.....
.....
よ　　な　　たた
世間が　汝を讃え賞むるとも
あ　　いたで　　わらう
吾の傷手をば嘲笑とも
その賞め言葉に汝も傷かむ
あ　　くるしみ　　もと
吾の苦惱に因づく故に

.....
.....
吾の思ひは　かき乱されて
よ
世間に屈せざる吾の「衿持」も
な　　な　　つい
今、汝に屈し　潰え去りしぞ
吾が魂すらも　吾を捨てさり

すべて終れり　無益な言葉
ことのは
綴るは止めむ　吾が詩も
うた
されど　手ぐれば　思ひ出の
た
吾が意に背き　迫りこむ

さらばぞ　汝　わかれ
袂別とは
きずな
すべての紐　たち切りて
うつろ
心枯れいて　空虚な　孤独
あ
吾の今恋ふは　ひたすらの死ぞ

Fare thee well! and if for forever,
Still for ever, fare *thee well*:
Even though unforgiving, never
'Gainst thee shall my heart rebel.
Would that breast were bared before thee
Where thy head so oft hath lain,

While that placid sleep came o'er thee
 Which thou ne'er canst know again:
 Would that breast, by thee glanced over,
 Every inmost thought could show ! 10
 Then thou would'st at last discover
 'Twas not well to spurn it so.
 Though the world for this commend thee—
 Though it smile upon the blow,
 Even its praises must offend thee,
 Founded on another's woe:
 Though my many faults defaced me,
 Could no other arm be found,
 Than the one which once embraced me,
 To inflict a cureless wound? 20
 Yet, oh yet, thyself deceive not—
 Love may sink by slow decay,
 But by sudden wrench, believe not
 Hearts can thus be torn away:
 Still thine own life retaineth—
 Still must mine, though bleeding, beat;
 And the undying thought which paineth
 Is—that we no more may meet.
 These are words of deeper sorrow
 Than the wail above the dead; 30
 Both shall live—but every morrow
 Wake us from a widowed bed.
 And when thou would'st solace gather—
 When our child's first accents flow—
 Wilt thou teach her to say "Father!"
 Though his care she must forego?
 When her little hands shall press thee—
 When her lip to thine is pressed—
 Think of him whose prayer shall bless thee—
 Think of him thy love *had* blessed! 40
 Should her lineaments resemble
 Those thou never more may'st see,
 Then thy heart will softly tremble
 With a pulse yet true to me.
 All my faults perchance thou knowest—
 All my madness—none can know;

All my hopes—where'er thou goest—
Wither—yet with *thee* they go.
Every feeling hath been shaken;
Pride—which not a world could bow— 50
Bows to thee—by thee forsaken,
Even my soul forsakes me now.
But 'tis done—all words are idle—
Words from me are vainer still;
But the thoughts we cannot bridle
Force their way without the will
Fare thee well! thus disunited—
Torn from every nearer tie—
Seared in heart—and lone—and blighted—
More than this I scarce can die. 60

[First draft, *March* 18, 1816.

First printed as published, April 4, 1816.]

Byron is not mad, but bad!

悪魔に身売りした Byron は、彼の高貴な生き方を放棄した！

Annabella は、Byron を導いて 天国へゆくことを 唯一の使命と考えた。

今、Byron と共に、地獄への道を ひた走るのであれば Separation へと
踏みきるより ‘私のとるべき道は のこされていない！’ と 決断した、^{ひや}冷や
かに。

とりわけ 数学に秀でた Annabella の冷徹な 推理をもってする 決意！

数学者と詩人の勝負では その結着は 自明である。

Byron は、^{なにゆえ}何故の Separation だったのか、終生 不可解であった という。
そして この Separation は、すべての者の心に Byronic Mystery! とし
て残った。

Poor Byron!

いのち
生命 つきる日まで 詩人につきそった 忠僕 Fretcher は しみじみと
述懐した。

“Lady Byron ほど、Byron を御するに 不器用だった 女性は いなかっ
た” と。

‘虚の Byron’ と ‘実の Byron’

Annabella は Byron の 真の姿を 果して観じ得たのだろうか ???

ロンドンの空に忽然と現われた彗星、^{かがよ}その燦然と耀う光が忽然と消えた
とき、その星を永遠に英国より追放し去ったのは、最も近くその星に接近した
Lady Byron だったのか？

参 考 文 献

- 1) Elizabeth Longford: Byron, Hutchinson.
- 2) Ernest Hartley Coleridge: The Poetical Works of Lord Byron; Lewis Prints.
- 3) Francis, M. Doherty: Byron.
- 4) Leslie, A. Marchand: Byron's Poetry, John Murray.
- 5) John, D. Jump: Byron, Rontledye & Keygan Paul.